

東高通信

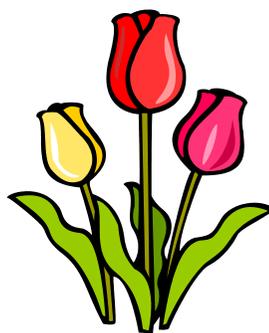
令和3年度 3月特別号

今月の内容

- ・3月の予定
- ・学年より

三年生のみなさん卒業おめでとうございます。いろいろな思い出のある東高での三年間はきっと皆さんの人生の支えとなります。これからの皆さんの活躍を期待します。

日	曜	学校行事等	学年・進路・生徒指導	生徒会・部活動関係・その他
1	火	卒業式	小論文指導	1・2年臨時休校
2	水			13:40～生徒校舎内立入禁止
3	木			生徒校地内立入禁止
4	金			生徒校地内立入禁止
5	土			生徒校舎内立入禁止
6	日			生徒校舎内立入禁止
7	月			生徒校地内立入禁止
8	火			生徒校地内立入禁止
9	水			生徒校地内立入禁止（※追検査実施の場合）
10	木			
11	金			生徒校地内立入禁止
12	土			生徒校舎内立入禁止
13	日			生徒校舎内立入禁止
14	月			生徒校舎内立入禁止（13：30まで）
15	火		卒業生のお話を聞く⑥1年⑦2年	
16	水			
17	木	【45分授業】		
18	金	終業式		
19	土			
20	日			
21	月	春分の日		
22	火			
23	水			
24	木			
25	金	新入生オリエンテーション①		
26	土			
27	日			
28	月	新入生オリエンテーション②		
29	火			
30	水	離任式		
31	木			



卒業生のみなさんへ

3学年 佐藤 伸也

福島東高校創立40年目の節目に入学した40期生が卒業を迎えることとなりました。卒業生の皆さん、保護者の皆様、ご卒業おめでとうございます。特に、2・3年次は多くの制約がある毎日でしたが保護者の皆様には、さまざまなかたちで本校の教育活動にご協力とご理解を賜り、心より感謝申し上げます。

さて、40期生は新型コロナウイルス感染症の影響で、今まで当たり前とっていたことができず、常にマスクをし、教室は常時換気、手指のアルコール消毒、昼食は黙食、できる限り距離をとっての会話など、不自由な生活でした。学校行事も修学旅行が代替行事になり、自然文化探究学習、3年に1度の公開文化祭、2年連続でマラソン大会が中止になるなど、卒業アルバムの写真を選んだ係の生徒たちの「私たちは思い出に残る行事が少ないね。」「前の学年の人たちは楽しそう。」などの会話を聞き本当に心が痛みました。一方で、部活動に関しては、練習時間や練習方法を工夫し、感染対策をしながら最後の大会やコンクールに出場することができ、3年間の努力の成果を発揮してくれました。吹奏楽部、合唱部の定期演奏会やダンス部の発表会も、無観客ではありましたがご家族の方々の前で発表できたことは本当に良かったと思います。生徒が中心となりできることはないかを模索し、努力したことはこれからの東高の伝統の一つとして引き継がれていくと思います。

コロナ禍でも学びや部活動を続けることができ、また共通テストや個別試験を無事受験できたのは、生徒一人一人の心掛けはもちろんのこと、ご家族の協力があったからだと思います。本当にありがとうございました。

学年として少しでも40期のみならず関わりを持ちたい、応援したいという思いで2020年3月5日からClassiで配信を始めた「今日は何の日？」も2022年3月1日で727回になります。毎朝7時30分に、その日の出来事や新聞記事・新聞の社説などを掲載し配信してきました。新しいクラスがわかる4月1日以外は、なかなか「見ました」の数が増えませんでした。私のルーティンの一つです。卒業式後もClassiが使用できる3月31日まで続ける予定です。

3月1日、今日は何の日？

今日は、「福島東高校40回目の卒業証書授与式」。
卒業式（Graduation ceremony）は、卒業証書を得ることで教育課程を全て修了したことを認定し、そのお祝いをする式典。
特に日本では、学校教育法施行規則によって定められた学校行事となっている。
欧米でも大学の学位授与の式典はあるが、各学校の修了ごとに祝う式典は日本と韓国でのみ見られる習慣。
また、卒業生が感謝を伝える式典でもあり、節目をつける式典でもある。

今日のお題：『福島東高校3年間を振り返り、自分自身が成長できたと思うことをまとめてみよう。』

学年集会で、「飛べなくなったノミ」の話をしたことを覚えていますか？過去の体験や自分の思い込みが自分の行動を止めてしまうという例え話、飛べなくなったノミも環境が変わるとまた元のように飛べるノミになるという話でした。この3年間、東高での学校生活を通して環境の力はとても大きいと感じたのではないのでしょうか？一つの目標に向かって誰と一緒に時間を過ごすかはとても大事です。みんなのこれから先の人生はまだまだ長いです。人間だれしも、壁にぶつかることがあります。時にそれはとても乗り越えられない壁だと感じ、挫折してしまいたいようなことがあります。しかし、その壁は……。イチロー選手はこんなことを言っています。「壁というのは、できる人にしかやっこない。越えられる可能性のある人にしかやっこない。だから、壁があるときは、チャンスと知っている。」自分が壁だと感じるもの、それは実は自分に与えられた課題、その課題と真摯に向き合い、乗り越える努力をすること、それは自分を成長させるチャンスです。「飛べるのに飛べないノミ」になってはいけません。周りの状況をよく把握し、自分の現在地をしっかりと確かめ、時にはいったん立ち止まって作戦を練り、しっかりと先を見極めながら自分の足で一歩一歩歩みを進め、「支えられる存在から誰かを支える存在」になってください。

卒業しても、みんなを応援する気持ちに変わりありません。40期学年団一同、全力でみんなの活躍を祈っています。



「放課後、生徒たちと何かやりたいね〜」。いつも職員室の向かい側に座る洋充先生と、こんな雑談をしています。その思いから、冬休み中には1・2年生の希望者と福島地裁の裁判傍聴へ行ったり、日本刀の名匠をお招きして刀剣美を鑑賞する会を開いたりしました。そう、二人とも「学校の外」や「放課後」にこそおもしろい人がいて、自由な学び(遊び)があるとたく信じて疑わない不良教師なのです。

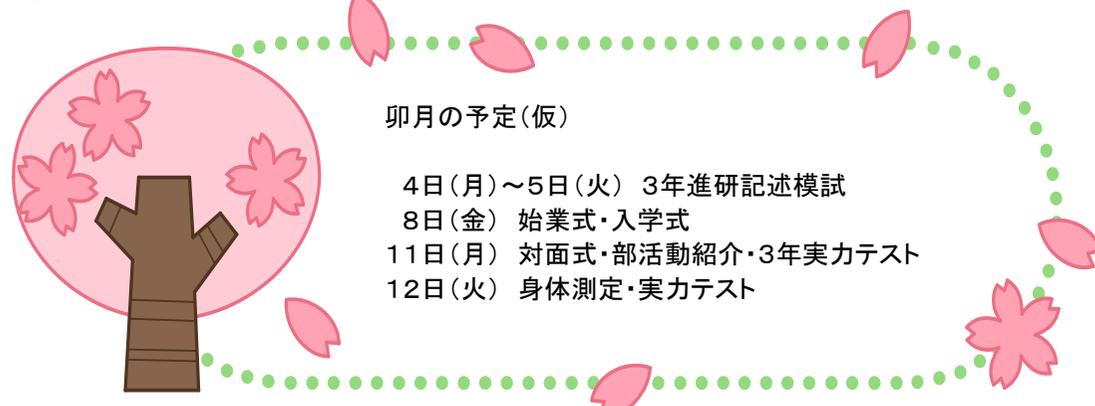
そもそも、私は小学生の頃から一秒も学校にいたくない子どもでした。それよりも一人でお城(鶴ヶ城)を探検したり、カレンダーの裏紙に想像上の合戦図を描いたり、図書館で本を読みながら歴史小説を書いたりしている方がよっぽど勉強になるのになあ、と日々の学校生活を鬱々と過ごす子どもだったのです。

そんな小学生だったので、5年生になると強制加入させられる「部活動」が、とても嫌でした。渋々サッカー部に入りましたが、放課後は剣道の道場に通っていた私に両立できるわけがありません。それでも部活を休むと先生に叱られ、部員には白い目で見られます。そもそも、放課後は「自分の時間」じゃないか！そんな悔しさを抱きながら、放課後は友だちの「やっさん」と毎日、校舎裏の塀をよじ登って脱走していたものです。

建築家で作家の坂口恭平さんは、小学生のとき既に、この社会には「学校社会」と「放課後社会」という二つの世界があることを見抜いていたそうです(『独立国家のつくり方』、講談社現代新書)。「学校」は同じものを提供して、それをクリアすれば評価されるゲーム型の社会。それに対して「放課後」は、自分で漫画を描いて雑誌を編集したり、RPGを紙に落とし込んで創ったり…と、要するに自由でクリエイティブな社会です。

後者が魅力にあふれた領域であることは言うまでもありませんが、しかし現実社会はむしろ学校同様にルール化されたゲーム社会が支配します。それゆえ坂口さんは、大切なのは「この二つをちゃんと認識して生きていく」ことであり、それが社会を変えていくことに通じると言います。「学校社会は変わらない。変えられるのは放課後社会とのバランスだけだ。／学校社会は消せないけれど、認識を変化させることはできる。それが『考える』という行為である。これは裏を返せば、「考える」人間であるためには、「学校社会」一色に生活を染められてはダメで、二つの「社会」を自由に行き来できなければならないということです。

さて、東高生の諸君はこの二つの「社会」をバランスよく持ち得ているでしょうか？いや、東高はそれを担保しているでしょうか？もちろん、自由が与えられれば、直ちに「考える」人になれるわけではありません(現状から察するに、スマホで時間を浪費する皆さんの姿が目に見えます)。にもかかわらず、「思考」や「創造」が自由や余裕が与えられていなければ生まれないことも、また真理です。そもそもschoolの語源がギリシア語で「暇」を意味するscholēであることからすれば、それが無い学校など語義矛盾でしかありません。いっそのこと教科書を捨てて街へ出てみてはどうでしょう？この意味で「文武両道」を脱構築することは、「新しい伝統」を謳う東高にふさわしいと思うのですが、過激でしょうか？



卯月の予定(仮)

- 4日(月)~5日(火) 3年進研記述模試
- 8日(金) 始業式・入学式
- 11日(月) 対面式・部活動紹介・3年実力テスト
- 12日(火) 身体測定・実力テスト

ちっちゃな頃から悪ガキでしたが、15で不良と呼ばれずに、なんとか人としての道を踏み外すことなく今日まで生きてくることができました。これまでの人生、手のひらから落ちて路地裏で地を這うように生きてきた自分ですが、そんな自分だからこそなにか皆さんにお伝えできることがあるかもしれないと考えながら、キーボードを叩いています。

高校時代の自分は、将来の夢も希望もなく、なりたい職業はもちろん志望校なども決まっておらず、漫然と授業に出席し、課題をこなし、模試をやり過ごすという日々を送っていました。進路をはっきりと意識するようになったきっかけは、忘れもしない高2の6月、柔道の師から告げられたその一言でした。曰く、「お前は〇〇大学へ行って、将来保健体育教師として母校に戻ってこい」と。思わず「はい」と答えたものの、それですんなりと進路目標が定まったわけではありません(当時は師に対して「いいえ」と答える選択肢はなかったのです)。なぜなら、自分の柔道はともその大学で通用するようなレベルではありませんでしたし、なにより保健体育教師というのは自分にとって別世界の存在だったからです。また、今にして思えば、敷かれたレールに乗っかることに対する若さゆえの抵抗も少しはあったかもしれません。

相も変わらず、自分の中では確固たる目標が定まらずにダラダラと学習している体を装いながら、柔道にだけは真摯に励む日々。そんな自分にも時の流れは容赦なく現実を突きつけてきます。3年生の夏休みで部活動に一区切りをつけると、否応なしに受験生としての取り組みを求められるようになりました。それでも本格的な受験モードに切り替わることなく、現実逃避をするかのようになぜか古本屋通いを始め、片っ端から本を読み漁りました。その甲斐あって、よせばいいのに「文学部へ行って、国文学を学びたい」などと、勘違いも甚だしいことを考えるようになります。経済的な理由で私立は無理ですし、浪人もできません。ということで、夜に虫の声が賑やかになる秋口、「国公立の文学部」を目指して、ようやく本腰を入れた受験勉強(のようなもの)が始まったのでした。

しかし、当然のことながら、気づいたときにはもう手遅れでした。最終的に、師走で街が華やぐ頃「二次対策までは手が回らなくても、センター試験ならなんとか間に合うかもしれない」という後ろ向きかつ安易な理由と、インターハイ・国体とも県予選の決勝で同じ相手に敗れた悔しさを晴らすべく「清水の舞台から飛び降りたつもりで超一流の環境に飛び込んで、とことん柔道をやってみよう」というちょっぴり前向きな理由の「合せ技一本」で、志望校を「国立体育系(国体)」に決定しました(ちなみに、自分の「決勝で敗れる」というジンクスは、なぜか現在の弟子に受け継がれつつあるようです。次こそは彼がこのジンクスを打破して、必ずや優勝することを願ってやみません)。

進路実現においては、まず「ゴールの設定」が重要であることは言うまでもありません。目標なき努力はとても辛いものですし、目標があるからこそ艱難辛苦を乗り越えられるということもあるでしょう。しかし実は、目標が定まらない人こそ、本当にやりたいことが見つかったとき手遅れにならないように、選択肢を狭めることがないように、その時どきで己が為すべきことに全力を尽くして己の爪を研いでおかねばならない、ということに気がついていただけたでしょうか？また、何か一つのことを真摯に懸命に打ち込んでいけば、それがきっかけとなって道が開ける、などということが時にはあるのかもしれません。この駄文が、「子守歌」となることなく、(東高では少数派であろう)やりたいことや目標が見つからずに迷っている人の覚醒に少しでも役立つのなら、この上ない喜びです。

